

氏家寿子編

『現代消費生活論』

井出ふさえ

一

「国民生活の向上には、経済の成長が必要な条件であるが、それだけでは十分な条件とはいえない。というのは、国民生活は何より収入と支出とからなり、前者に注目すれば、職業や収入の安定と向上が欠くべからざる要因であり、後者については、所詮、今日の消費は昔のような生活自助の原則のみで貫きうるものではない。」という序をもつ本書は、その筆者であり、全体の編者である氏家寿子氏の日本女子大学停年退職を記念して発刊されたものである。同学長、有賀喜左衛門氏のはしがきによれば、家政学界において、このような形で記念論文集が編ま

書評 氏家寿子編『現代消費生活論』

れることは、きわめて稀なことであり、先例となるものである。ということがある。

福山京氏によってかかれた「第一章 家計研究の二つの途の記述によれば、わが国で家事経済を体系的に扱った最初の著作、松平友子氏の『家事経済学』、『家事経済綱要』が出たのは大正一四年であるが、一三年後に、氏家寿子氏の『最新家庭管理と家事経済』が出され、これは、「家庭生活を、因習と旧慣から解放して、科学的で合理的なものに改めようという意図」に立ち、「まず収支バランス」が第一の問題となり、「限られた収入」の費目配分が第二の問題であったという。

退職にあたって、「今日の消費生活は昔のような生活自助の原則のみでは貫きうるものではない。」と書かれた編者は、約三〇年前は、いみじくも、その生活自助の科学的方法を、因習と旧慣から未解放の家庭生活のなかに導き入れることを意図されていた。

二

わが国におけるこれまでの家庭経済に関する研究は、二つのまったく異った分野で、しかもまったく異った観点で行なわれている。その一つは家政学(または家庭管理学、家庭経営学)で行なわれた家計研究で、他は、社会問題を解くために行なわ

れた家計研究である。この二つの研究は、同じように、個々の世帯の家計を分析し、研究していながら、相互の交流と接触がまったくなくて、それぞれが独自の方法で独自の分野を切り開いてきている。これは、しかしわが国だけのことでなく、アメリカやイギリスでも同じような事情のようである。」

「この二つの家計研究を決定的に分かっているのは、その研究の視点である。家事経済における家計研究の研究の意図と態度とは……人が生活していくために、絶対の基盤たる家庭生活の在り方にかかっている。したがって、その研究の標準は、人間の生活の在り方に、それゆえに、根本的には人間の在り方向けられている。しかし、後者の家計研究の課題は、貧乏の問題であり、消費経済の問題であって、それは社会と経済の問題である。人の生活の周囲をとりかこむ問題であり、人の生活をおしゆがめている外側の問題なのである。前者が形而上的指向をとっているに対して、後者はどこまでも現実の問題なのである。」

「私の考えでは、二つの家計研究はどこかでふれ合うことがありえても、本質的には別のものだといわなければならない」

(第一章 家計研究の二つの途 籠山京)

籠山京氏によれば、「形而上的指向をとる生活自助」のいわば技術的追及に出发し、いま、その原則の限界を自ら指摘して、

退職の言葉とする家政学の一家の記念論文集の第一章に、これら二種の家計研究が、「本質的には別のものだ」と声を大にしていわれているのは、きわめて興味深い事実である。なぜならば、多くの家庭経済に関する書物は、いままで、この二つのものを折衷した態で、まとめられているからである。

「家政学で行なわれた家計研究」が、「生活自助の原則」の限界を指摘するいま、「社会問題を解くために行なわれる家計研究」は、あたかも安易な折衷、無原則的な結合を恐れるかのようにみえる。

三

籠山京氏のこの指摘をうらづけるものを本書のなかに現実に見ることが出来る。その構成をみてみよう。

I 理論

第一章 家計研究の二つの途 籠山京

第二章 現代における消費者行動論 宇野政雄

第三章 賃金の地域間較差と団体交渉 藤本武

第四章 個人消費と社会経済との関連 松尾均

II 実態

第一章 国民生活の国際比較 宮崎勇

第二章 消費支出の日本の実態 川端良子

第三章 世帯変動と労働力の価値法則 石毛 鏌子

第四章 世帯構造と生産・労働・消費 高沢 武司

第五章 主婦の賃労働者化をめぐる問題 広田 寿子

III 対策

第一章 アメリカ・イギリスの消費者対策 山崎 勇

第二章 日本の消費者対策 青山 三千子

第三章 家政学史の一断面 氏家 寿子

IV 研究

第一章 アメリカ家政学思想史 松下 英夫

第二章 標準生活費のあしどり 宮崎 礼子

第三章 消費生活史年表 日本女子大学家政経済学研究室

理論・実態・対策・研究というまとめ方をもち、「現代消費生活論」という表題の本書は、その内容にそくして言えば、むしろ、「現代消費生活論集」と題するべきであったと私は考える。編者は、どこにも、個々の研究の位置づけを行なっておらず、個々の研究は、当然のこととして、それぞれの問題について、さまざまな方法により、さまざまな視点から叙述されているからである。個々にわたって紹介し、批判を行なうことは、私の能力の果しうることではない。

四

「明治維新らしいの消費生活の発展を、日本資本主義の発展のなかで位置づけようと試みたものである」という解説にはじまる消費生活史年表について、一言ふれておきたい。生活史に関連して食生活史、服飾史など既刊の研究があるが、これはそれぞれ対象が限定的であると共に記述的であって分析的なものを殆んど見ることが出来ないからである。そしてまた、生活様式論、ないし生活史の方法は、いまだ、全く未開拓のまま残されているからである。なお、この年表の場合、消費生活の発展とは何かという問題が残されるが、年表の解説はそれにはふれていない。

「この消費生活の発展を日本資本主義の発展とむすびつけようとする考え方には、若干の異論があるかもしれない。というのは、日本の消費生活はこれまで伝統的、固定的でそれほど大きな変化をしなかったと考えられてきたからである。……しかし、これは消費生活が資本主義の発展と無関係であることを意味するものではない。むしろ、そうした停滞的な消費生活を日本資本主義がうみだしたとみることができる。と同時に、この停滞的といわれる日本の消費生活がなんらの変化を示さなかったわけではない。明治維新らしい百年の間に、徐々にではある

がかなりの変化がおこっている。……日本の消費生活は日本資本主義の発展のなかでしだいに変化している。」

「この年表の構成であるが、たんに消費生活の発展に関する事項だけで構成しないで、それと関連する広い範囲の事項を取り上げ、これを総過程・生産過程・分配過程・消費過程・社会過程の五つの過程に分類して集録したのである。これは日本資本主義との関連で消費過程を把握したいという上記の考え方とともに、消費過程はたんに消費自体として発展するのではなく、生産・分配過程との関連のなかで、さらには政治的、社会的、諸変化との関連のなかで発展し、変化していくものだという考え方によるものである。」

極めて新鮮な試みであり、正統的な方法でもあると私は考える。

そのような立場からしても、「消費生活の発展を日本資本主義の発展とむすびつけようとする考え方には、若干の異論があるかもしれない」のは、この筆者が指摘するように、「日本の消費生活がこれまで伝統的、固定的でそれほど大きな変化をしなかった」からでもなく、また、異論がないとしても、それが、「徐々にではあるがかなりの変化がおこっている」からではないという意見も、また、許されるべきであらう。

それは、消費生活の発展ないし変化の必然性ないし法則性の

把握の方法についての理解にかかわる視点からの疑問である。この視点にたって、この年表をみる時、そのすぐれた着想にもかかわらず、というよりもむしろ、着想がすぐれているだけに、年表という形式自体に疑問をもつとともに、特に、その消費過程の扱い方に大きな不満を抱かざるを得ない。

ここに、その第一頁の一部を引用すると次のようである。

年代 一八六八年（明一）

総過程 本源の蓄積期

王政復古 政体書（三権分立形式による）

生産過程 棉凶作、棉花高騰 棉花綿糸綿製品輸入 横須賀製

作所設置

分配過程

「鍛冶工、製鹽工、鋳物工、木工、塗工等の如きは従前より存在したる技術を用いることを得るが故に、其職工中には工場以外にて之に従事したる者あり」

（農商務省『鉄工事情』。職人の賃労働者化、旋盤工、仕上工など新興職人の誕生、横須賀造船所に囚人労働力採用すむ）

消費過程

ラムネの登場、アイスクリーム売り出さる 散髪店の開店 各種ミシン輸入

社会

墮胎禁止公布 近江の農民一揆、三河、備前の農民一揆

この形の年表に附された「大づかみの時期制の特徴」は次のように述べられている。

「第一段階において、本源的蓄積の進行——封建的家臣団の解体、地租改正——によって無産階級がうみだされ、これらの人びとの生活は貨幣経済化の進行とあいまっていっそう低下した。消費内容は一部の階層の洋風化にもかかわらず、大多数の人びとはこれまでの状態をつづけるをえなかった。」

年表の消費過程の項はたしかに一部の階層の洋風化を示す事例を掲げている。ラムネ、アイスクリーム、散髪店、ミシンこれらは、まさにニポック・メーカーキングな新しい商品とサービスである。

しかし、そもそもやがて定着する新しい生活様式は、一定の時代の、一定の社会において、いかなる階層をその担い手とし、伝播のインシヤティブをもつものとして展開するのであろうか、そしてまた、その生活様式は、どのような意味において、その階層に結合したのであろうか。それが歴史の発展のなかで、広汎にひろがり、やがて社会的に定着するのは、そこにそれを必然とする現実的な根拠があるからであらう。個々の生活史の事実はこのような視点からの位置づけを経て、歴史に記載されるべきであらう。

この年表作製にたずさわった方々が、総過程、生産過程、分

配過程、消費過程、社会と名付け、区分けされた歴史の諸事実は、この階層と新しい様式の定着を分析するために、必ず素材としなければならないものであったとしても、それは、年表のように、消費過程とならんで併記されるものとしてではなく、一定の生活様式の成立を立体的に把握するための歴史的基盤としてとり扱われるべきであらうと私は考える。

五

籠山京氏によれば、一つは形而上学的指向をとり、一つは現実の問題を扱っているために、本質的には別の物だといわれる二つの家計研究は、生活様式論、生活史の方法の確立をまっぴらして、その課題は「貧乏の問題であり、社会と経済の問題である」といわれるが、貧乏とは、いたって、社会的、経済的であるととも、歴史的なものであると考えるからである。